どくろ銭

TOKYO BOOKS

どくろ銭　¥420

著者無検印承認

昭和四十四年九月五日印刷
昭和四十四年九月十日発行

著作者　角田喜久雄
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社

本社　東京都新宿区西大久保三-一二六
出張所　東京都新宿区払方町一番地
振替・東京二四六七五七
電話・(二六〇)三四五五〇

どくろ銭

角田喜久雄

TOKYO BOOKS

目次

黒猫　五
銭酸漿　一二
呪殺銭　三三
血闘　六三
闘花蝶　七三
檜様　九一
驚怖神功開宝　一〇一
蠢く影　一一八
剣難　一三三
あだし情　一六八
夢魔　一九〇
金銭開基勝宝　二一八

犬公方　二五一
妬心　二六八
恋慕草紙　二八〇
宿縁　二九九
浮田の八宝　三〇八
傷心　三二二
襲撃　三三二
無残　三六九
逸したり　四〇九
相寄る魂　四一六
日本の夜　四二九

装幀　中尾進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

黒猫

一

はッと息をのんでお小夜は目をあげた。

何かそこを、影のように、かすめて過ぎた気配のあるのを感じたからであつた。

だが、戸外はしみいるように、音もなく降る雨である。

幾日も幾日も、降るかと思えばやみ、やんだかと思えばまた降る、長雨の、鬱陶しい薄暗さの中に、草や梢の緑はようやくその濃さを加えて、何かしら甘酸つぱい、花の薫りのようなものが家の中にまで漂つていた。

しんと、風のそよぎさえない静けさ。

(気のせいかしら?)

銀色に煙る雨へまぶしそうに細めた目を、膝の縫物の上へ戻して、軽く吐息をつく。

(お父様がお亡くなりになつてからもう二ヵ月もたつてしまつた……私も、本当に気が弱くなつて……)

流石はお武家のお娘御、と他人から言われる程気丈に生きては来たお小夜であつたが、こうした物淋しさの中に独り居ると、しみじみ取り残された孤独さを思わずにはいられない。父の生存中は、貧しくとも、こうして賃仕事にまで何かと張りのあつたものを、唯一人になつてしまうと——

お小夜は、気をとり直したように、またせつせと針の手を動かし始めた。

窓外の緑が映つて、透徹るように白い膚の色である。ほんのりと紅のさした頬のあたりへ、濡れたように黒い髪の毛が二筋三筋乱れかかつて、睫の濃い澄んだ眼、血を含んだように紅い唇の可憐さ、見つめていると、思わずぞつと見震いしそうな美しさである。

象牙のように滑らかな頸、すらりと伸び切つた手足、肩から胸へかけての豊かな丸味にも、匂うばかりの初々しさ

が満ちあふれて、年齢はやつと十八か、九であろう。
お小夜は仕事に没頭するかと見えたのに、またびくッと瞼をふるわせて、手をとめた。
(何だろう? たしかに……)
何か、動いているのだ。
その気配のする方を、息をひそめて、じつと追う。
とたん、
(あッ! 猫!)
と、危く叫びが唇をついて出ようとした。
一隅の、暗い壁の隅に、真黒な猫が何かをねらつてでも居るように、らんらんと目を光らせてうずくまつているのだ。
お小夜の視線を睨みかえすようにしながら、その動物はじりじりと動き出す。野獣のもつ精悍さを満身にみなぎらせて明らかに敵意を示しながら、今にも飛びかかりそうな態勢で、そろそろと横へ壁を伝つて行く。
この近所で見た事もない猫だ。
(何処から来たのだろう?)
猫は歩きながら肩をいからせて身体をたてた。そのまま、そろりと二歩。音もなく壁際をはなれたと見ると、次の瞬間、その姿は鳥影のようにさッとお小夜の眼前をかすめて、窓から銀色の雨の中へ消え去つてしまつた。
あッと声をあげる間もない速さである。
惹かれたように腰をうかしたお小夜は、しかし、窓際へ走り寄ろうとした足をとめて、そのままじッと立つていた。
目がまじまじと勝手元の小暗い蔭を凝視しているのだ。
「誰?」

流石、侍の娘らしい、りんとした詰問の声である。何時の間に入つて来たものか、そこには、見慣れぬ男の後姿が向うむきにかがみこんでじッとしていた。

二

「誰方です？　そこに居るのは？」
お小夜は鋭く叫んで、その方へつかつかと歩みよつて行つた。
男はじッとかがみこんだまま動こうともしない。手桶へかぶりつくようにして、水を飲んでいるのだ。
「貴方は?!」
お小夜は重ねて詰問する。
ごくごくと喉の鳴る度に、肩をせわしげに息をつく、ひどく濡れはてた体だ。長いこと、雨の中を歩いて来たのであろう。見ると、その素足から衣類の裾へかけて一面の飛泥（はねどろ）である。
町人には違いないが、遊人か唯の若い衆か、お小夜には判断もつきかねる風采（なり）だ。
余程渇いていたのだろう。まだ、喉を鳴らして飲んでいる。
やがて、男は手桶を投げ出すように置いて、やつと顔を上げた。
「済んません。お騒がせ申して……」
そう言いながらも息を弾ませて、目はきよときよとと背後の雨の彼方をすかして見ている。
「悪い野郎に追われましてね。済んません。一寸、かくまつておくんなさいまし」
片手でお小夜の方へ拝むようにする。片頬に古い刀傷の痕のある、暗い人相の男なのだ。
「貴方は？」
とさえぎろうとするお小夜へ、
「これだ。頼んます」

と、しきりに手を合せて見せながら、返事も待たずに、慌ただしく座敷へ上つて来た。
一足毎に、衣類からしたたる水が足を伝つて畳をぬらす。その足跡へなじるように目をやつたお小夜が、水滴と一緒にさつと畳へにじんだ色の紅さえ、
「あれ！　血が……」
流石に女性である。眉をよせて、
「お怪我を？」
「いいや。大した事はねえのです。一寸ばかり、擦りむいたんで……」
裾をまくつて見ると膝の辺が柘榴のようにえみ割れて、あふれ出る血が踹を真紅にそめつくしている。
「手当をなさいませ。抛つておいてはいけませぬ」
お小夜はそう言つて、武家のたしなみとして不断から用意してあつた晒布や傷薬をとり出して来た。
「済んません。済んません」
男はひよこひよこと頭を下げながら、晒布を裂いて傷口を縛りはじめた。
「済んません。助かります」
そう言いながら、男の目はしげしげと部屋の様子を見廻した。そして、ちらりとお小夜の顔を盗み見ながら、
「お一人、なんですか、娘さん？」
お小夜はその顔をきつと見かえしたきり黙つていた。
男は直ぐずるそうな笑顔になつて、
「いや、あつしア決して御心配になるような怪しいもんじやアございません。堅気の職人でして、名は米五郎と申します。その……悪い野郎に心にもねえ喧嘩をうられましてね……」
べらべらと喋りかけたのが、ふと、何を耳にしたのか急に息をひそめたと思うと、
「あッ！」

と、突然うめくように低く叫んだ。
「あ、ありやア？」
何処からか、陰気な猫の鳴声が聞えてくる。

三

何処から聞えてくるのだろう。窓の外か、屋根の上か？　陰気な、聞く人の心を真黒に塗りつぶしてしまうような鳴き声だ。
お小夜は何故かしきりとさつきの黒猫の姿を聯想していた。たしかに、聞き慣れたこの辺の猫の声とは違つている。
（だが、どうしてこんなにあの猫のことが気にかかるのだろう？）
その声は、しかしそれつきり絶えてしまつて、窓の外は唯音もなく降りしきる煙の様な微雨の拡がりである。
米五郎と名乗る男は、欲てた耳の奥からその鳴声が消え去つてしまうと、はじめて呪縛から解かれたようにほッと息をついた。
「折入つてお頼みがあるんだが……」
「女一人の住居です。本当は、すぐにも出て行つて頂きたく思つているのです」
「そりやア解つている。出ても行きましよう。だが娘さん。こりやア、本当に折入つてのお願えなんです」
男の声は急に哀願の調子を帯びて熱心になつて来た。寧ろ、おどおどと四方へ気を配りながら、
「お願えだ。是非、助けると思つて聞いてやつておくんなさい。いや、決してむずかしい仕事じやアねえ。ただ使いを頼まれて貰いてえのです。届け物を……それも近えのだ。ここからは三丁とはありますめえ。馬道の与兵衛店、と聞いたら、或は御存じじやアねえかと思うが、そこの和吉つて男のとこを尋ねてしかと手渡して貰やア上乗なんでさ。頼まれておくんなさい。お礼も充分しようし、恩にも着る。あつしやア何しろ、悪い野郎につけられているん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

で、もう少しここへ置かして貰わねえと……ねえ、娘さん。この通りだ」
手を合せてまで、大の男から頼まれて見ると、まだ世間なれぬお小夜にとつては、強いてそれを断わる言葉も見つからないのだ。
「ただ、お使い丈で宜しいのでございますね？」
と、つい言つてしまう。
「そ、そうです。一言の口上もいりやアしねえのです。唯届けて貰やアいいんです」
「その、お届け物というのは？」
「済んません。済んません。じやア、行つて下さるんですね」
男はその時まで背後へかくすように持つていた風呂敷包を前へ押しやりながら、
「この包たつた一つでさア」
男の姿と同じに雨にずぶ濡れた見すぼらしい包なのである。
それへ手をかけた瞬間、
（若しこれが不正な品でもあつたらどうしよう？）
ふと、そんな危惧に似た気持が胸元をかすめたが、男の哀願を目にすると、お小夜の娘らしい優しさは、もう何も言い得ずに立ち上つていた。
「じやア、お願えします。大事な品だから直々にお渡し下さいましよ。貴女の帰りなさるまで、あつしやあ此処で待つていることにしよう」
お小夜は何故ともなく家の中を一渡り見廻した。そして仏壇の父の位牌へ手を合せて、勝手口から庭へ出て行つた。
見も知らぬ人に留守を預けてその人の使いに立たねばならぬ羽目に陥つたお小夜——思えばそれがお小夜の波瀾を極めた運命の第一歩だつたのである。

時に元祿五年。長い梅雨がまだあけやらず続いていた。

銭酸漿

一

灰色の空から絹糸のような雨が小やみもなく降り注いでいる。
庭の水溜りには忍冬の花瓣が一面に散り敷いて、雨も空気もむせかえるようなその匂いだった。
お小夜は狭い庭を横切つて裏へ出た。
傾いた蛇の目傘の蔭に、お小夜の皮膚は心持蒼さをまして目もさめるような美しさである。
「娘さん」
耳のすぐ側で呼ばれて、お小夜は吃驚したように足をとめた。
傘を廻すと、何時の間に現われたのか、鋭い男の目が真向からちかちかとお小夜を凝視しているのだ。
「私に何か御用でござりますか？」
「うむ。一寸、聞きてえ事があつて……」
見れば見る程、冷りとするような鋭い目附だ。
「お前さん、今この家から出て来なすつたろう？」
「さようでございます。ここから出て参りましたが……」
「あつしやア……」
と言いかけて、懐から銀磨の十手の先を一寸覗かせながら、
「御用の者だが……」
「……」

お小夜は無言でうなずいた。その男が、河内屋庄助という、この界隈では名の通つた御用聞である事はお小夜も知つていたのである。
「聞くがね。今しがたこの辺へ……さようさ、年齢の頃は四十位。頬に刀傷の痕のある……そんな男が来た筈なんだが、見かけなかつたかね？」
「さア……」
と言い淀んで、お小夜は胸の中で蒼ざめた。
(やつ張り、あの人は御用聞に追われるような悪者だつたのだ)
だが、お小夜は咄嗟に、自分自身でも驚く位冷然と、
「さア、存じませぬ」
ときつぱり言い切つてしまつていた。
「知らぬ？」
庄助は眉をよせて空を仰いでいたが突然、きらりと目を向けなおして、
「本当か？」
「はい……」
「可怪しいな。たしかにこの辺へ逃げこんだ形跡があるのだが……」
「そう申されれば……何やら、走つて行く人の足音らしいものを聞いたようにも……」
皆まで言わせず、庄助ははげしく首を振つてさえぎつた。
「見たら、直ぐ知らせてほしい。それ丈だ……」
そう言いながら、お小夜の手にある包へじろじろと視線を注いでいる。
(もし、これを見られたら……)
そして、中からのつぴきならぬものでも出て来たらどうしよう。

はッとして心臓の凍りつく思いであつたが、庄助はそのままお小夜の側をはなれて、すたすたと歩み去つて行く。背筋を流れおちる冷汗の気味悪さを意識しながら、虎口をのがれた心地でお小夜は足早に歩き出した。

（だが、去ると見えた庄助が、傘のままそこの垣根にもたれて、じつと此方を見送つていた事を、お小夜は果して気づいていたであろうか）

二

（嘘をついてしまつた！）

お小夜は、取りかえしのつかぬ事をしでかしてしまつたように息を弾ませながら、追いかけられるような気持で歩いていた。

（若し、あの人の隠れている事が見付かつたりしたら、どうしたらいいのだろう？）

あんなに、嘘を強く言い切つてしまつた自分の気持が、まるで信じられないように思えて来て、

（いつそ、此処から引返して、皆打明けて話してしまおうかしら……）

しかし、あの庄助の鋭い視線と、米五郎の哀願する目の色とを思いくらべては、お小夜は知らず知らず足を早めて、まるで運命の糸にでも操られて居るかのように、何時の間にか馬道の与兵衛店まで来てしまつていた。

訊ねて見ると、和吉の住居はその路地の、棟割長屋の一番奥にあたつていた。

「御免下さいまし」

門口へ立つて、そッと声をかける。

唯々、一刻も早く用を済ませてしまいたい気持であつた。

「もし。御免下さいまし、和吉殿のお住居は此方でございますか？」

返事がないのである。

（お留守なのか知ら？）

当惑したように眉をひそめているお小夜の側を、手桶をさげた一人の老爺が通りかかつた。行き過ぎようとしたのを立ちどまつて、

「お前さん。和吉さんをお訊ねかね？」

「はい。さようでございます。お留守なんでございましようか？」

「そうですよ。生憎と、先刻出かけてしまいなすつてね。そうそう、言伝がありましたつけ……誰か尋ねて来たら、蒼雲寺裏の梅鉢長屋まで来てくれつて……」

「蒼雲寺と申しますと？」

「門跡様の近所できけば、誰でも知つています。すぐ解りまさ」

老爺に礼をのべて、お小夜は仕方なしに歩き出した。片手の包が、一入重さを加えたようにさえ思えてくる。

何処まで行つても雨の街だ。

風が屋根を吹き渡ると、雨は霧のように煙つて横に流れる。鈍く光る灰色の空の下に、お小夜の唇ばかりが冴えて新鮮な果実のように紅い。

雨に淋しい浅草観世音の境内を抜けて、本願寺近くまで来たお小夜は当惑したように足をとめた。

蒼雲寺の位置を訊ねようにも、あたりには訊ねる店屋も往来の人影さえもないのである。

お小夜は朧気な記憶をたよりにして本願寺の土塀添いに廻つて行つた。

（あの人はまだ家の中にかくれているだろうか？）

あの蒼白い骨ばつた頬へ鋭く残つている刀傷を思いうかべると、お小夜は急にせき立てられるような気持になつて知らず知らず足をいそがせはじめた。

塀に添つて角を曲ろうとする。

とたん、

「あ！」

と思わず声をあげて立ちどまつた。
出会頭に、危く身体丈はよけたが、蛇の目の骨が相手の傘へぶすりと音をたてて突きささつてしまつたのだ。
「御免遊ばしませ。失礼いたしました」
と、慌てて腰をかがめるお小夜へ、
「いや、身共こそ……」
見おろすように、若い侍の顔が笑つている。

三

「御免下さりませ。思わぬ粗相をいたしまして……」
「いやいや。粗相はお互のことです」
若い侍は、雨傘の破れ目へ視線をやりながら明るく笑つた。
お小夜は申訳なさそうに、
「まア、大変、お破き申してしまいました」
「それよりも、貴女の裾へ泥をはねかえしてしまつて……や！　大分よごしましたな」
そう言われて、己れの足許へ目を落したお小夜は、幾重にも継布のあたつた足袋の惨めさに、思わずぽッと顔を赧らめた。
これまで、清潔でありさえすれば、少しも意に介しなかつた足袋の見すぼらしさなどが、今日に限つて何故こうも気になるのであろう。
耳のあたりがほんのり赧らむと、うつむいた襟元は、かえつて白々と可憐に見えるのだ。
若侍は青年らしい内気さで、しかし何か心惹かれる様子で、その襟元へそッと視線を注いで居る。
髪にも風采にも貧しさがしみついたような浪人姿だ。細つそりと見えて、その実、隆々と肩の張つた若々しさ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo